



1958年6月29日19時09分（日没後） 大田原気象通報所にて

房状高層雲 (Altostratus floccus), $C_M=8b$ と観た。

雲の解説書では何れも驟雨又は雷雨の前兆とかいてあるが、写真の場合はむしろ、驟雨が終り地上の寒冷前線通過を観測してから後である。天頂付近にあったAcには日没(19h 03m)後も暫時陽が射していた。しかし、約9分後の19h 12m頃からその陽射しが消え失せていった。この時のAcの雲高(H)を推算すると、

$$H \text{ km} = 6371 \text{ km} \times \tan \alpha, \tan \frac{\alpha}{2}$$

日没と陽射し消失の時刻差9分より、 $\alpha = 2 \cdot 15'$ とすると、 $H = 4.8 \text{ km}$ となる。

6月下旬になっても、オホーック海方面の高気圧が弱く梅雨らしい天候にならなかつたので、各地で漏水の憂が日毎に濃くなってきてきた。6月29日の午後、本邦にはやや顕著に寒気が流入し、以後の北高型の切掛となった。そういう意味では、梅雨型の前ぶれともなった雲である。(撮影と説明 篠原久男)